

金銭と意思決定について

内田智士（倫理研究所研究員）

はじめに

日常生活は、判断と意思決定の連続である。我々は普段の生活を、常に物事を選択しながら送っていて、人生の中でさまざまな決断の場面に出くわす。例えば意思決定や選択・決断に要する時間の長さで分類するとすれば、長期的に段階を経て決定されるものとして、どの会社に就職するのか・誰と結婚するのかなど、中期的な熟慮を必要とするものとして、どの学校に入るのか・どこに住むのかなど、短期的・瞬間的な判断を必要とするものとしては、どの道を通って帰るか・今日は何を食べるか・電車で席を譲るか譲らないかなどがある。また意識的に思考をして意思の決定をする場合もあるだろうし、無意識的に物事を選択する場合もあるだろう。では我々は、自分たちの行っている判断や意思の決定について、どの程度の自己理解をしているのだろうか？

さまざまな影響を及ぼす意思決定がある中で、我々は通常、自分たちがどのようなプロセスを経て選択し決断をしているのか、注意を払うことはほとんどない。それは、意識的に熟慮をして決定を行った場合でも同じである。この場合、物事を選択や決断自体は意識的に行われるが、そのような決断にいたった理由について、客観的な視点で考えられることはない。

本稿では、我々の意思決定と選択の仕方には、どのような特徴と癖があるのか、特に短期的な判断を要する決定と金銭との関係について、意思決定と選択の科学で知られていることを述べていきたい。それに先立って次章「意思決定に付随する不合理」では、我々の意思決定がいかに外部の環境やそれからの刺激に影響を受けやすいかを見る。第3章「金銭の意思決定に及ぼす影響」では、外部からの刺激として特に金銭を考えたときに、それが我々の意思決定にどのような影響を及ぼすのかに関して、行動経済学における実験や観察の結果をレビューする。そこでは、金銭に刺激を受けることで我々の労働意欲や公共性・道徳性が低下することが示される。そして最後の章「意思決定心理学からみた金銭の本来的役割」で、第3章のような結果が得られるのは、金銭それ自体のせいなのではなく、むしろそれは我々の心理的な癖に起因するということを、経済学者・安富歩の提唱する経済学に沿う形で見ていく。